

書評

渡辺洋平

『ドゥルーズと多様体の哲学 ——二〇世紀のエピステモロジーにむけて』

人文書院、2017 年

原 罌

本書は平成 27 年に京都大学大学院に提出された博士学位論文をもとに執筆された著者にとって最初の単著であり、20 世紀を代表する哲学者であるジル・ドゥルーズ（1925-1995）の思想を論じるものである¹。この哲学者については既に国内外で豊富な研究の蓄積があり、多くの書籍が世に出ている。まずは本書の特徴と戦略について確認しておく必要があるだろう。

ここ数年の本邦に限ってみれば、2013 年はドゥルーズ研究にとって特に実りある年であった。この年には軌を一にして國分功一郎『ドゥルーズの哲学原理』（岩波書店）と千葉雅也『動きすぎてはいけない——ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』（河出書房新社）、山森裕毅『ジル・ドゥルーズの哲学——超越論的経験論の生成と構造』（人文書院）といった優れた研究書が上梓されている。

これらの書物と本書との違いの 1 つとして、ヒュームやベルクソン、スピノザといった哲学者を扱うドゥルーズのモノグラフ類と対決する際のスタンスが挙げられるだろう。ドゥルーズにおける「～主義」をどのように捉えるかの違い、といっても良い。たとえば國分は「自由間接話法」という考え方に注目し、こうしたモノグラフ類もドゥルーズの哲学を表現するものとみなす。千葉はドゥルーズ哲学のヒューム主義に注目し、それを「誇張的」に論じることで斬新なドゥルーズ像を提示する。山森はドゥルーズ初期のモノグラフ類から『差異と反復』までに考察対象を限定することでドゥルーズの「超越論的経験論」を学習や習得といった観点から論じてみせた。

対する本書ではドゥルーズによるモノグラフ類は適宜参照といった扱いに留められる。なぜか。喜びの感情によって自己変容するスピノザ的な生き方に触れるくんだり、著者は次のような問いを投げかけている。「ここで問題となるのは、ドゥルーズがスピノザについて語っていることを、そのままドゥルーズ自身の思想

¹ 著者の専門は美学、哲学。本書以外の論文には「衣服論事始め——衣服と時間あるいはメゾン・マルタン・マンジェラと反時代的なもの」（『vanitas』No.002）、翻訳にゲオルク・ジンメル「モードの哲学」（共訳、『vanitas』No.003）がある。

として語ることが可能なのか否かである。ドゥルーズの書いたモノグラフ類を、そのままドゥルーズの思想として受け取ることができるのかどうか。スピノザ的な生き方がそのままドゥルーズ的な生き方なのかどうか。このふたつを即座にイコールで結ぶことができるのか」(134 頁)。たしかに、この問題提起に対しては——とりわけ「そのまま」、「即座に」といった点を考慮に入れたとき——端的な答えを出すことは難しい²。

それでは本書はどのような戦略を取るのだろうか。それは著者がドゥルーズの哲学的な主著とみなす書物にダイレクトにアクセスすることである。その書物とは以下の8つである。まず『差異と反復』と『意味の論理学』、映画論『シネマ1』と『シネマ2』(ドゥルーズが「みずから哲学することを試みた著作」、そして『ディアログ』、『アンチ・オイディプス』、『千のプラトー』、『哲学とは何か』(「フェリックス・ガタリおよびクレール・パルネとの共著」)である(3-4 頁)³。こうした戦略をとることで、本書はドゥルーズのベルクソン主義、スピノザ主義、ヒューム主義...といった特定のテーマをひたすらに掘り下げるよりも、むしろ、その思想のコアとなる部分に直接赴き、それを極めてクリアに掴み取り、そうしてバランス良く全体像を描き上げてみせる。ここに本書の特徴がある。もちろん、全体像の提示といっても「広く浅く」式の論述では少しもない。各章で扱われるテーマのそれぞれが入念に検討され、ドゥルーズが組み上げる論理やその展開が明晰な言葉で語られる。

もう1点、本書の特徴を挙げておこう。それは副題にある「エピステモロジー」という語によく表現されている。著者「あとがき」によれば、本書においてこの語は、一般に「科学認識論」と訳されるような狭義のものではなく、古典ギリシャ語エピステーメの意味合いで用いられており、様々な学問についての考察といったニュアンスが込められているという。その言葉通り、本書の議論は単に哲学的なものに閉じられることはなく、生物学や熱力学、人類学、そして映画や絵画といった芸術まで幅広い学問領域が俎上に乗せられる。これらの多様な知識や学からドゥルーズがいかに触発され、独自の思想を織り上げていったかを浮き彫りにしている点もまた、本書をユニークなものにしている。

² とはいえ著者も「ドゥルーズはその主著においても、過去の哲学者や他の思想家、作家の議論を縦横無尽にパッチワークしながらその議論を組み立てる」(6 頁)という前提を踏まえた上で議論を展開していることは注記しておきたい。

³ 括弧内は本書における分類。著者はドゥルーズとガタリにとって「ふたりで書く」ことは「多様体の実践なのであり、それゆえに両者の思想を峻別することはあってはならない」(10 頁)と考える。著作の扱いについては「はじめに」で周到に論じられる。

さて、全体は序章と6つの章からなる。おおまかに分けるならば、前半の3つの章は個体化や発生の問題を扱うものである。続く第4～5章では、70年代後半から展開されるあいだでの生成変化の哲学を中心とした考察が行なわれる。最後の第6章は芸術論の検討がなされるとともに、それに事寄せて以上の展開が改めて辿り直されることになる。順を追って確認してみたい。

序章「ドゥルーズの哲学とはなにか」では、『哲学とは何か』における概念と思考のイメージないしは内在平面との関係が論じられる。ドゥルーズにとって概念の創造とは哲学の営みそのものであるが、その創造と同時にそれを支える諸前提としての内在平面が描き出されることになる。このことを確認しつつ、本書において著者が注目する概念として「非人称的個体化と前個体的特異性」が提示される。この概念を立ち上げた時、同時に描かれる内在平面が「わたし」といった人称や個体以前の「だれか on」の世界である。「ここにドゥルーズ哲学のリミットが存在している。本書はこの立場から、ドゥルーズ哲学におけるいくつかの論点とその帰結を論じるものである」(42頁)。

第1章「非本質的なものの思考」は『意味の論理学』の読解を中心に据え、個体化と特異性の問題を正面から取り上げる。ストア派からライプニッツ、ホワイトヘッドへという出来事(動詞の不定詞で表現される)の理論を巡る3段階の発展が辿られ、この世界における共可能性／非共可能性の問題が論じられる。本書で例示される、イギリスの工業地帯に生息する蝶には灰色の個体と黒色の個体が存在する。いま、灰色の個体を例とするならば、この個体は〈灰色になること〉という出来事と〈黒色になること〉という出来事のあいだの差異を肯定し、〈灰色になること〉という出来事を受肉することで、灰色の個体となる(個体化は個体に先立つ)。〈灰色になること〉と〈黒色になること〉という出来事、「それらの出来事はすべて、存在論的に等しい価値を持つ」(74頁)。個体とは「一義的存在」という共通の出来事に、〈灰色になること〉といったすべての出来事(個体化する差異)が到来することで構成されるものである。そして出来事＝特異性のあいだに価値の優劣がないという見方からは、すべてが特異であるとともにすべてが凡庸であるという「非本質主義」が導き出されることになる。以上のような差異と非本質的な出来事から個体を思考するドゥルーズの「存在の一義性」の議論が入念に検討された後、同一性と本質に帰着するアリストテレスの「存在の多義性」との比較検討がなされる。

続く第2章「映画からひとつの政治史へ」では、まず上述の非本質主義と映画という芸術との親和性が論じられる。映画は1秒間に24コマ(サイレントでは

16 コマ) という均質なショットを送り出す。クライマックスと呼ばれ得るような決定的瞬間(特異なもの)もまた、他のコマと存在論的に優劣をもたない均質な1コマ(ありふれたもの)の集積によって構成されるのである。またアンドレ・バザンの批評を参照しつつ、戦後イタリアのネオ・レアリズモ以降の映画にもまたドゥルーズの非本質主義との共通性が見出される。これらの映画では、原因と因果や状況と行動の結びつきが解体され、物語の単位は生の瞬間の連続となり、瞬間毎の優劣は失われるのである。さらに様々な映画を例示しつつ、潜在的イメージや時間イメージに対する考察が行なわれ、ブニュエルやアラン・レネといった監督が非共可能的な複数の世界を立ち上げる仕方が論じられる。非共可能的な世界が立ち上がることによって真理という形式は失墜するだろう。ここから著者は映画の持つ「偽なるものの力」をプラトニズムの転倒というドゥルーズの重要な課題と接続し、論を進めていく。第2章の議論は第1章で展開された幾分抽象的な存在論に、映画作品を用いて具体的なイメージを受肉させる点で効果的だ。また『意味の論理学』(1969)の議論を『シネマ』(1985)を用いて変奏する手付きは、非本質主義や出来事を巡る思想がドゥルーズ哲学の主調音を成していることを示す点でも巧みである。

第3章「強度と非有機的生命」では『差異と反復』を中心に世界の発生の機構が論じられる。まずドゥルーズが世界を差異から出発して思考する方向性を熱力学と共有していることが確認される。しかしながら、著者も指摘するように、熱力学の議論では初期状態の差異はそもそも解消される運命にあるかのようである。100度のお湯と10度の水を混ぜたときに熱がお湯から水に移動し一定の温度で安定する、といったように。ドゥルーズが考えるのは、こうした2つの事物の間の差異ではなく、質と延長の発生そのものに関わる「それ自身における差異、即時的な差異」(154頁)であり、強度の概念である。これは質と量の共通の母胎となるものを表現する概念であり、ここでは「卵」(受精卵)によって説明される。「さまざまな細胞や器官に分化していく以前の卵(受精卵)に、ドゥルーズは質でも量でもなく、軸、勾配、ベクトルといったある種のずれや運動性だけを読みとろうとする。それは分化の後に見出される器官や組織とはまったく異なるものでありながら、それらを現実的に生み出すものである」(164頁)。強度とは、こうした「ずれや運動」としてのエネルギーそのものなのである(ただしエネルギー保存則に従う科学的な意味のものではない)。なお、こうした意味での卵は未だ特定の機能を担う器官、口、舌、胃、腸を表象する以前の段階にあり、有機的でも無機的でもありえない。それは、いわば非有機的なものだ。ドゥルーズにとっての生

命とはまさにこの非有機的なものに他ならず、器官が分化した後の有機体とはむしろ、非有機的な生命を閉じこめるものなのである。人々は日々を有機体として生きざるを得ないが、強度的な在り方に到達するための手段は残されている。その1つが芸術であり「日常的な経験の次元において強度的な非有機的な生命の力を看取り、それを別様に展開させること」(186頁)の重要性が主張される。

第4章「多様体の論理とノマドロジー」では『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』の読解が中心となる。まずは70年代後半とそれ以前の著作において多様体の概念が担う意味合いが変化することが確認される。『差異と反復』における多様体が「超越論的な潜在性の次元に置かれており、むしろ潜在性の積極的なありようを示すための概念」(204頁)として用いられていたのに対し『ディアローグ』以降、多様体は常に二項機械との関係によって規定される。著者によれば、重要なことは多様体それ自体にも2つのタイプがあり、両者は混淆状態にあるということだ。1つは無数の構成要素のあいだでの生成変化とそうした変化に基づく個性を表わす「此性」によって表現されるリゾーム状の多様体、もう1つは主体や人称に関わる樹木状の多様体であり、主体の形成とあいだでの生成変化という「ふたつの作用はつねに同時に作用し、すべてはこのふたつの作用のなかで生起する」(226頁)のである。この「ふたつのタイプの多様体とその混淆と分離、それこそが機械圏の内実なのであり、ドゥルーズとガタリの存在論の帰結である」(277頁)。本章では『千のプラトー』においてドゥルーズとガタリによって打ち出される平滑空間と条理空間、戦争機械と国家機械、遊牧民と定住民といった様々な二項の各々はそれ自体すでに多様体なのであり、単純に価値判断できるものではないという重要な指摘もなされる。著者が挙げる海の事例は興味深い。風や波、色、響きを頼りとしていたかつての経験的な遊牧的航海術は、天文学や地理学に基づく航海術にとって代わられる。これは平滑空間の条理化である。しかしながら、出発地も目的地も持たない現存艦隊や、姿を隠す戦略潜水艦の登場により、海は再び平滑空間となり、平滑なまま国家に所有されることになる。この平滑空間は暴力の観念を伴っており、必ずしも肯定的なものではないのである。この他、人類学の成果を参照する『アンチ・オイディプス』における歴史理論に対する詳細な分析を含むなど、文量としても読み応えのある章となっている。

第5章「欲望と無意識」は、引き続きガタリとの共著の読解を中心とし、分裂性分析の概念が考察される。ドゥルーズとガタリは、精神分析が無意識を父—母—子というオイディプス・コンプレックスの三角形の図式へと還元することで、本来社会的な広がりを持つ欲望を私的な領域に押し込めることを批判する(この

点は第4章でも論じられる)。2人は無意識あるいは精神病者の妄想はそもそも歴史的社会的領域全体と関係していると考える。こうした観点から多様体に走る様々な線の混淆と分離、個人を貫く流れを分析するのが分裂性分析である。本章では、まず『差異と反復』における議論に立ち戻り、カントとアルトーにおける自己の問題を検討し、分裂症的コギトの概念についての考察がなされる。カントの「内観のパラドクス」は、わたしたちが「意識することはできずともつねになんらかの〈他なるもの〉に触発されることによって、みずからの存在を規定されている」(297頁)ということを示している。思考できないということを強制的に思考させられているアルトーの状態は、カント的な統覚構造が崩壊してしまった腐食した思考の状態を可視化することになる。このことが確認された上で、パラノイアと分裂症による2つの妄想が論じられる他、欲望との関係から健常者における性愛といったテーマが検討され、分裂性分析の特性と実践、その意義が明らかにされる。

最後の第6章「芸術とともに」では、まず『千のプラトー』と『哲学とは何か』の議論が検討され、ドゥルーズとガタリが自然哲学が芸術的自然哲学あるいは美学的自然哲学といえるものであることが示された後、ドゥルーズ初期のプルースト論における芸術論との比較検討がなされる。自然に見出される芸術の3段階を確認した上で、著者はドゥルーズとガタリがなぜ芸術を自然の内に置き直す必要があったのかという問いを立てる。著者の答えは「芸術作品が主観的なものでも物質的なものでもなく、独自の身分を持つものだということを強調するため」(342頁)というものだ。ドゥルーズとガタリは『哲学とは何か』において、芸術を「被知覚態」と「情動」からなる感覚のブロックを創造し、出来事を具体化するものと定義している。芸術は、主観的な体験からも客観的な物質からも独立し、それ自体で存在する。それは感覚を立ち上げる「モニュメント」である。著者はドゥルーズとガタリが、動物たちの世界に現れる「表現の質料」にこうした芸術作品の主客から独立した身分、あるいは「感性的質」を見出したのではないかと主張する。とはいえ、著者は「ドゥルーズとガタリにとって問題となるのは、芸術が自然的なものかどうかではなく、むしろ芸術的な視点によって自然をとらえ直すことであり」、人間と動物の境界線が曖昧になるのは「あくまでも自然に対する芸術的な視点に依拠することによってである」(327頁)ということを示している。

最後に以上の芸術論とプルースト論との比較がなされる。両者に共通するのはどちらも「見る主体に依存しない視点」ないしは「ヴィジョン」が想定されている点である。しかしながら、プルースト論においては、芸術家が打ち立てた「視

点」に巻き込まれることが新しい世界の始まりに立ち会うという主体形成タイプの個体化が論じられるのに対し、『千のプラトール』や『哲学とは何か』では生成変化が眼目となり、ふたつのもののあいだでの此性タイプの個体化が論じられることになる。ここに「潜在性からの発生(genèse)の哲学ではなく、あいだでの生成変化(devenir)への哲学へ」(362 頁) というドゥルーズ哲学の変化が見出されるのである。

さて、ここまで本書の内容について順を追って概観してきたが、同書を読み解く面白さは様々なテーマや概念が複数の章にわたってリゾーム状に広がる点に(も)ある。著者「あとがき」には次のようにある。「前の章が次の章を基礎づけ、次第に発展していくような類いの書物ではなく、かといって各章が全く独立したものというのでもなく、各章が互いに反響し合うことでひとつないしは複数の図像を描くような、そんな書物を構想してみた」(366 頁)。たとえば、第6章には第1章で論じられた出来事概念が再び現れるし、第1章と第4章とは「存在論」に関する分析として共鳴する。第6章における「芸術的な概念から自然を捉えることで自然が芸術的なものとして立ち現れてくる」という議論は、序論で論じられた概念と内在平面との同時的な立ち現れの一例とみることもできるのではないだろうか。第2章で論じられる映画が第1章の議論の変奏であることは上でも指摘したが、映画はさらに「非有機的」な力の例として第3章でも登場する他、第5章においても妄想が社会的領域との関係のうちにあることを示す例としてニコラス・レイの『ビガー・ザン・ライフ』が取り上げられる、などなど。ぜひとも読者みずから本書をお手に取り、それぞれ自分なりの星座を描き出す楽しみを味わってもらいたい。

既に紙幅を費やしてしまった。ささやかなエピローグを記して筆を置こう。

ライブニッツ論『襞』を上梓したドゥルーズのもとに、ある日、奇しくも同じ文言が綴られた2通の手紙が届く。そこにはこう書かれている。あなたの言う襞とはわたしたちのことです。1通は、折り紙協会のメンバーから。もう1通はサーファーたちからの手紙であり、サーフィンとは波という自然の襞のなかに住まうこと、という見事な思想が記されていた。クレール・パルネとの対談においてこの逸話を披露しつつドゥルーズは、この時自分は哲学によって哲学の外に出ることで彼らと出会うことができたのだ⁴、と満足げに語る。

⁴ 以下の日本語版、「教養」(三浦哲哉訳)の項目を参照。ジル・ドゥルーズ『ジル・ドゥルーズの「アベセデール」』國分功一郎監修、KADOKAWA/角川学芸出版、2015。

20世紀フランスの偉大な哲学者ジル・ドゥルーズの思想は、いまなお哲学の外に身を置く人々をじっと待ち構えている。明晰な言葉によって彼の思想のコアとその全体像を領域横断的にあぶり出してみせる本書は、来るべき出会いのための最良の節点となるだろう。専門の研究者に限らず、ドゥルーズの著作を読んではみたもののその難解さに挫折した経験のある者、その議論の中心点に上手く照準を合わせることが出来ずにいた者、こうした読者が本書をきっかけとして新たな邂逅を果たし別様の世界へと開かれていくことを願う。